

## 東北地方の渥美と常滑

平泉町役場総務企画課 八重樫 忠郎

### はじめに

20年ほど前、駆け出しだった自分は、この同じ会場で、平泉から出土した常滑窯製品について話させていただきました。以後調査の進展に伴い、平泉は渥美や常滑の12世紀における主要な消費地であったことが判明しております。今日は、その研究成果を使い、近日に刊行された『愛知県史』における問題点や妥当性などについて、お話できればと思います。

### 1. 経塚と墳墓から

まずは、経塚と墳墓のことからお話しします。

東北地方では118か所、北海道のものと合わせて、全部で119か所の墳墓、もしくは経塚と考えられる遺構が見つかっています（第1図）。そのなかで、北海道の厚真町から常滑の大壺が出土しています（写真1）。この壺については、『愛知県史』のなかで中野晴久さんが書いておられますが、「極めて常滑に近い」という曖昧な表現になっており、ぼくは非常に残念に思っています。

たしかにこれは表面の釉等が飛んでしまっていることから一見すると常滑的ではなく、また器形的にも特殊な大型壺なわけですが、この壺とほとんど同じサイズの壺が平泉にはあるのです。

写真2は、平泉の柳之御所遺跡から出土したもので、これもまた特殊品です。若干なで肩気味の縦耳が付いた四耳壺で、頸部が厚真町の壺より少し長いと感じますが、ほぼ同じような形だと思います。平泉で出土したものは、焼きは非常に良いのですが、中の積み上げの仕方などは厚真の壺と非常によく似ており、同じ窯の生産ではないかと思うほどです。ぼくはこの壺の存在を知っていたので、最初から「常滑だ」と申しておりました。おそらくは今後も北海道から、この手のものが見つかるだろうと思っています。再び現世において使用されることを拒んだかのように口縁を打ち欠いておりましたが、これは東北地方の経塚に埋納された壺に良く認められる様相であり、また火葬骨も発見されなかったことから、この壺は経塚に埋納されたものであろうと考えています。

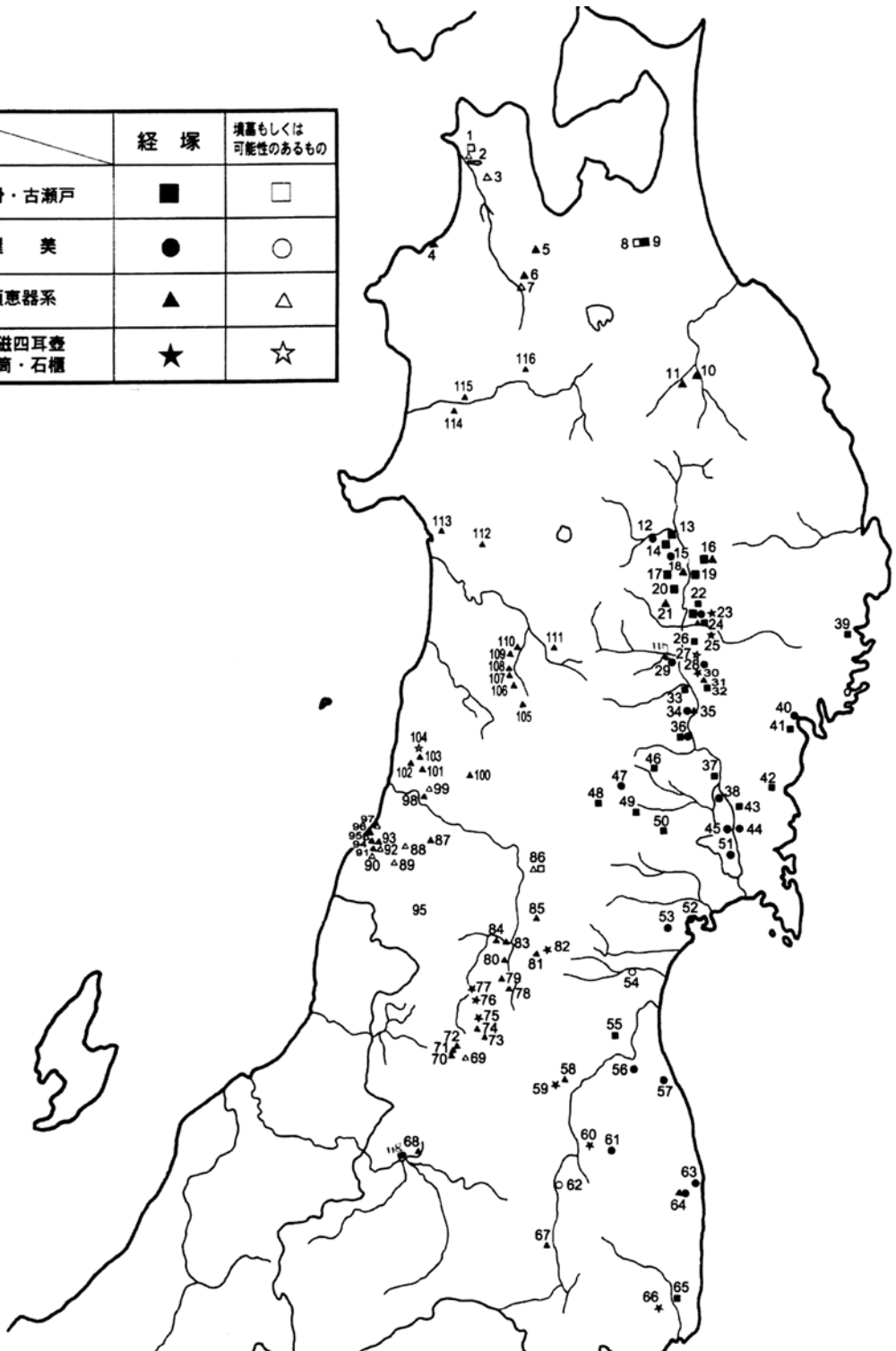


写真1 厚真町の常滑大壺



写真2 平泉町の常滑大壺

	経塚	墳墓もしくは可能性のあるもの
常滑・古瀬戸	■	□
渥美	●	○
須恵器系	▲	△
白磁四耳壺 経筒・石櫃	★	☆



第1図 東北地方の経塚と墳墓

## (1) 用いられた渥美と常滑の年代観と分布傾向

紀年銘資料というのは、東北地方には1割弱しかありません。経塚等に紀年銘資料が少ないのは、銅製経筒を用いない陶磁器埋納がメインだったためだと思われまます。ただ、いくつかは存在します。福島県喜多方市の松野千光寺経塚の石製外容器は1130年、岩手県奥州市高勝寺跡から出土したのも石櫃で1135年、山形県南陽市の別所山経塚の石櫃とともに出土した銅製経筒は1140年、山形県山形市の立石寺2号経塚の銅製経筒蓋は1167年ということです。また、記録しか残っていませんが、秋田県大森町の観音寺経塚では須恵器系の甕の中から1149年銘の銅製経筒が出土したとされています。

このように、12世紀の紀年銘資料からのみ見れば、12世紀前半は基本的にこの手の石櫃に埋められているということです。陶磁器に埋納されるのは、1149年のものが若干早い例としてありますが、おそらくは東北地方の経塚、もしくは墳墓に埋められている陶磁器というのは、多くが12世紀後半のものと思われる。紀年銘がないものをいろいろ見ましたが、そのなかには12世紀前半のものだと確実に言い切れるものはありませんでした。このことから、陶磁器埋納されるものの多くは12世紀の後半だろうと思っています。

このたび使用している実測図の多くは、20年ほど前にぼくが発表したものから転載していますが、この間の研究により東北地方の経塚に持ち込まれたのは、おそらく12世紀第2四半期です。その中でも12世紀前半は石櫃や石製外容器が主で、陶磁器使用は基本的に12世紀後半と思われる。

なお、経塚というのは末法思想の影響によるものと言われてきましたが、12世紀後半というのは、末法の世からすればすでに100年ほど経っているわけです。もちろん、経塚自体が、末法思想と無関係とは申しません。経塚遺文を見ても、末法思想を感じさせるものが結構残っています。しかし、おそらく経塚というのは、末法思想の影響というよりも、阿弥陀堂信仰や阿弥陀信仰といったものと盛衰を共にしていると考えていま

す。このことは、たぶん渥美、常滑の隆盛ともかなり深く関わってくるのではないかと考えており、詳しくはのちほど述べます。

第1図をご覧ください。東北地方の経塚と墳墓の分布図です。日本海側は須恵器系ものが多く出土していますし、太平洋側、特に岩手県に集中して、常滑と渥美の製品が非常に多く埋められています。青森県の陸奥湾付近には須恵器系ものが入っています。これを見ると、日本海側のもものあたりまで来るし、太平洋側のももの青森県七戸あたりまで行っています。最近では八戸からも常滑2型式の大甕の破片が出土しています。そのあたりが、太平洋側のもものと日本海側のももの結節点になっていると考えられます。

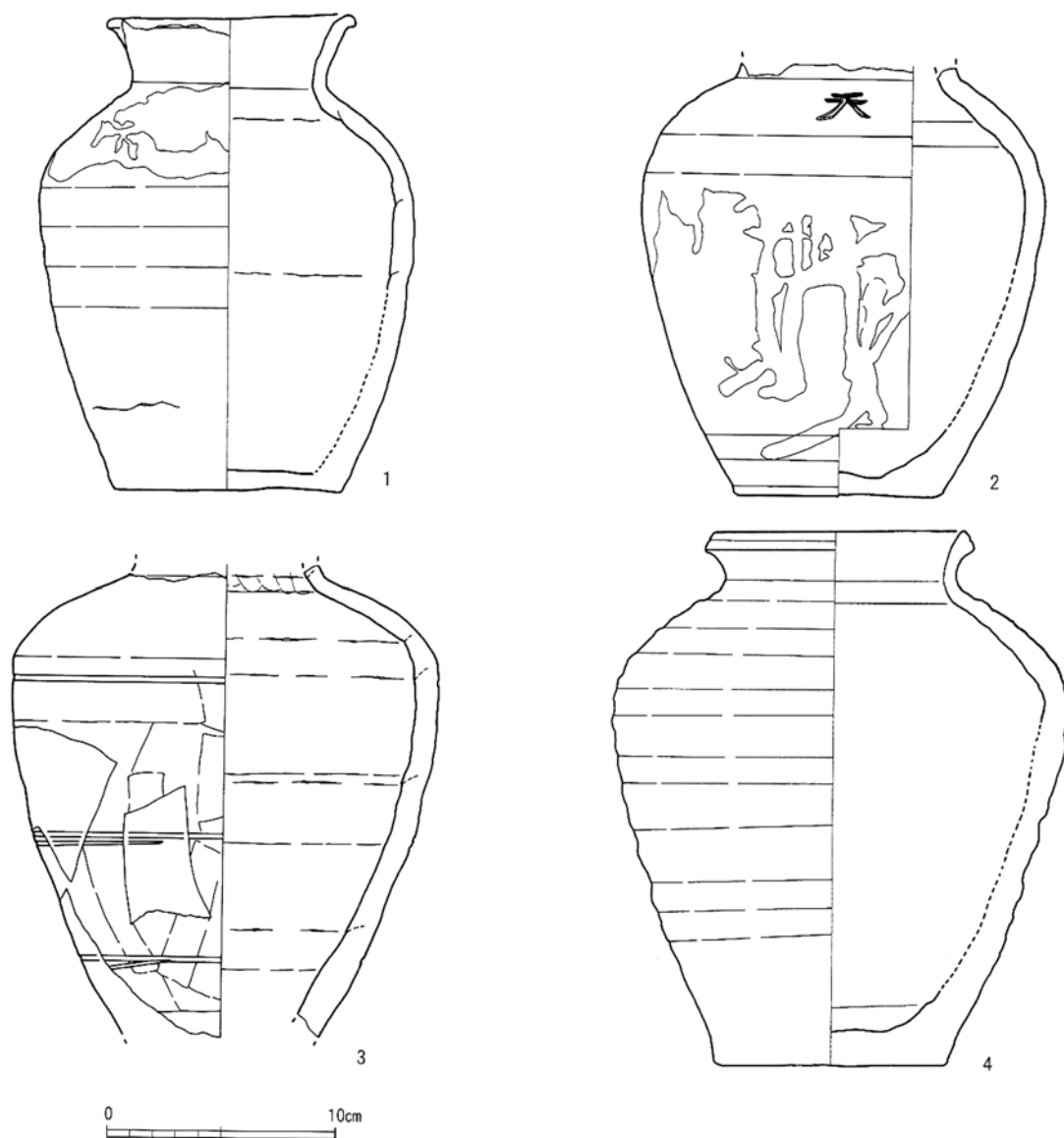
## (2) 上須々孫経塚

もう一つ、年代観での問題についてお話しします。

岩手県北上市の上須々孫経塚は、岩手県の方から秋田県に抜ける東西路付近から発掘されています。そこは平泉藤原氏三代秀衡が使用した道ということで、「秀衡街道」と呼ばれています。そのすぐ南側から見つかった経塚です。秋田自動車道を造るときにも「秀衡街道」の周辺の一部を発掘しており、平泉と同じ遺物が出土しています。ということは、伝承もまんざらではないのかもしれない。

この上須々孫経塚からは、2基の経塚(SX001、SX002)が見つかっています。SX001経塚から出た壺は、第2図の「1」と「4」です。一つの経塚の石積に2つの壺が置かれており、渥美は伏せて逆位に置いてありました。もう一つの須恵器系の壺は正位でした。また、隣のSX002経塚には、やはり渥美の壺が伏せて置いてありました。この類似した埋納状況から、SX001経塚とSX002経塚はそれほど違わない時期に埋められたと考えられます。また、SX001経塚の積石からは、ばらばらに割れた状態の常滑三筋文壺も出土しています。

問題は、2点の渥美壺です。「1」を見ると、底径、頸部径が大きく底部が分厚くなっています。



第2図 上須々孫経塚出土壺

この手のプロポーシヨンの渥美壺は、平泉からは出土例はありません。また一緒に埋められていた須恵器系の壺は、底部が静止系切り状になっています。産地については確実なことがわかりませんが、技法的には秋田の大畑窯のものと思われます。「秀衡街道」を通れば近い場所なので、おそらく大畑窯の製品である可能性が高い。窯からいえば、13世紀前半のものです。

すなわち本日の資料には、遠慮がちに「12世紀第4半期」と書きましたが、これら渥美壺は平泉以後のものであろうと考えています。「2」

の渥美壺も首に締まりがなく、底径が比較的大きく分厚い。このように、平泉以降と推測されるものが出土している経塚があるので。

ちなみに平泉以降とは、『吾妻鏡』によれば平泉藤原氏は、のちに鎌倉幕府を開く源頼朝に1189年に滅ぼされているので、それ以降のことです。このことを考古学的に証明できるかということですが、ぼくは20年ほど前に12世紀と13世紀の遺物を整理して、点数を比較してみました。陶磁器は、13世紀以降には60分の1に減少していますし、かわらけに至っては、おそらく

約 10 万対 1 程度に激減している。この遺物の激減の理由について、考えられることは一つだけありません。つまり、1189 年に平泉藤原氏が滅亡したという記録について、考古学的には否定する根拠がないことになります。

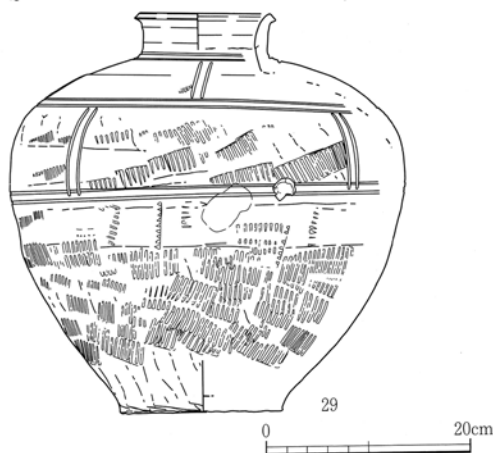
となると、平泉から見つかるものの大半は、1189 年以前のものであり、平泉から発見されず形式学的にも退化していると思われる渥美と常滑の多くは、1189 年以降のものと考えられるのです。『愛知県史』には反しますが、「1」と「2」の渥美に関しては、1189 年以降のものと言えるのではないかと考えています。

### (3) 金鶏山経塚

次に、金鶏山経塚です。第 1 図の「36」に位置するのが平泉町で、そこから出土した経塚です。

ここには少なくとも 9 基の経塚が設けられていたと考えています。1930 年に盗掘されましたが、盗掘者はなぜか写真等の記録をたくさん残しており、また多くの遺物は東京国立博物館に収蔵されています。その当時の写真から大きな甕も存在していたことが確認できますが、残念ながら現存はしていません。

金鶏山経塚から出土した渥美の袈裟襷文壺（第 3 図）は、渥美の図録には掲載されないものがないというほどの銘品です。近隣には、中野さんのお話にもあった花立窯跡という渥美系の窯跡があります。それについては、数年前に詳細に検討し



第3図 金鶏山経塚渥美袈裟襷文壺

てみた結果、12 世紀の第 1 四半期のものとぼくは考えます。

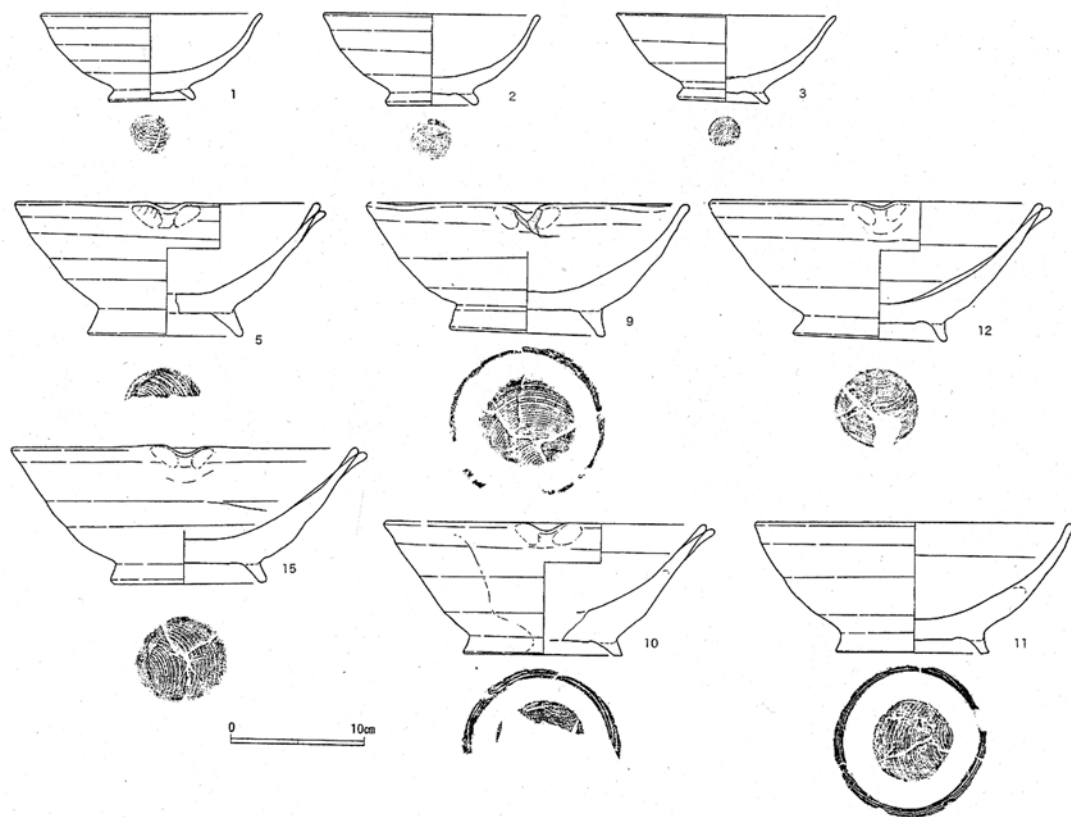
金鶏山経塚は花立窯跡のすぐ側にあるわけですが、火事にはならないにしても、窯跡の近くに経塚をつくるのはちょっと考えられないと思うわけです。そう考えると、金鶏山経塚の造営は、花立窯跡以降である 12 世紀第 2 四半期である可能性が高い。

また、これは昨日、中野さんの現地説明でも出ていた話ですが、片口鉢は中世陶器窯になって初めて出てくる器種です。では花立窯跡から出てくる片口鉢状のものは何かというと、碗の大きなものです（第 4 図）。碗と作りは同じで、回転糸切りして、高台を付け、それに片口を付けているものです。おそらく片口鉢の祖形として作られたものだろうと考えています。ちなみに、高台の端部が切り離されています。報告書には、「回転糸切りで切り離された」と書いてありますが、細かく確認したところ、ヘラ切りでした。ヘラで高台の端部を削っています。なぜそのようなことをしたかということ、例のない大型碗であるために耐久性が弱く、片口鉢のようにこねたりすり潰したりという用途には向かないので、高台を強化する必要があったと考えていますが、いずれにせよ、よくわかりません。

第 3 図の袈裟襷文壺に戻ります。これは『愛知県史』にも載っています。故榎崎彰一先生のご高論である『三筋文の系譜』によれば、この壺は下胴部まで袈裟襷文が展開しており、また竹管の幅も広いため、12 世紀前半のものとなります。ぼくはこの壺は、花立窯跡との関係から、古くても 12 世紀第 2 四半期のものだと考えています。

### (4) 全面施釉渥美壺

また東北では、全面施釉渥美壺が時々出土します。岩手県盛岡市一本松経塚、同陸前高田市越戸内経塚などから出土しています。陸前高田市は、「奇跡の一本松」で知られるところです。ちなみに、越戸内経塚の壺も陸前高田市の博物館に収蔵されていたので、今回の災害で失われただろうと思っていたら、偶然にも他のところに寄託していたた



第4図 花立窯跡出土碗と大碗

め被災を免れました。

また、福島県会津坂下町雷神山経塚から出土した渥美壺も、震災とは無関係ながらもしばらく行方不明でしたが、最近になって所在が確認されています。これらは全面施釉されていることから、藤原顕長銘の壺を生産した大アラコ窯のものだと言われており、ぼくもそう思っていました。しかし前述のように、東北の経塚は12世紀後半のものがほとんどだということを考えると、若干時期が下がってくると思われます。藤原顕長が三河守だったのは1136～1145年、1149～1155年です。1155年ぐらいであれば、ちょうどいいのかもしれない。

第5図の「2」は、越戸内経塚から出土した壺です。裏に、「いつ、どのような状態で見つかった」ということが墨で書かれています。出土状況がよくわかってありがたいけれど、できれば墨で書かないでほしかったという気持ちもあります。これとよく似た壺が、一本松経塚から出土しています。

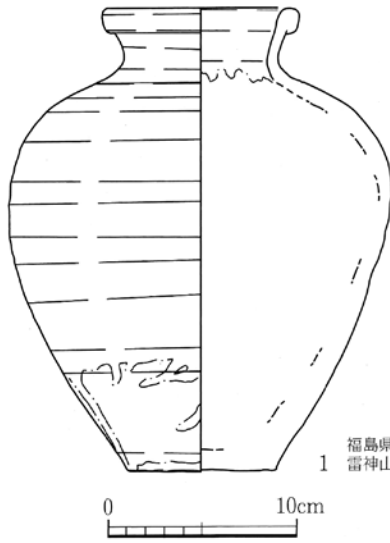
ただしこれらは刷毛塗りの全面施釉です。両者の違いは、一本松経塚の口縁が玉縁状になっているのに対し、「2」が折り返しの口縁であることです。また、「1」は、雷神山経塚の壺ですが、全面施釉ではあるものの、口縁は折り返しがくっ付いた完全な玉縁です。

ちなみに、折り返しや玉縁状の口縁部を有するこの手の形の壺は、平泉町の中ではいくつか発見されています。ただし完全な玉縁口縁の壺はまったくありません。ということで、同じ全面施釉だからといって、同時期のものだと言えるのかという疑問があります。施釉の仕方も違うので、「1」の年代が少し下がるだろうと考えています。

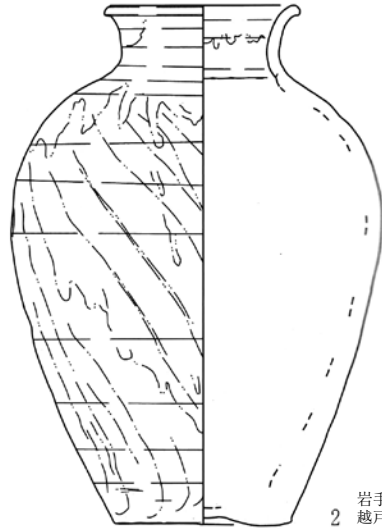
#### (5) 共伴遺物と出土状況から

共伴遺物と出土状況から、岩手県内でもある程度年代を推定できるものがあります。

例えば、岩手県奥州市寺ノ上経塚の渥美壺には、法華経が墨書された12世紀第3四半期前半のか



1 福島県河沼郡会津坂下町  
雷神山経塚



2 岩手県陸前高田市  
越戸内経塚

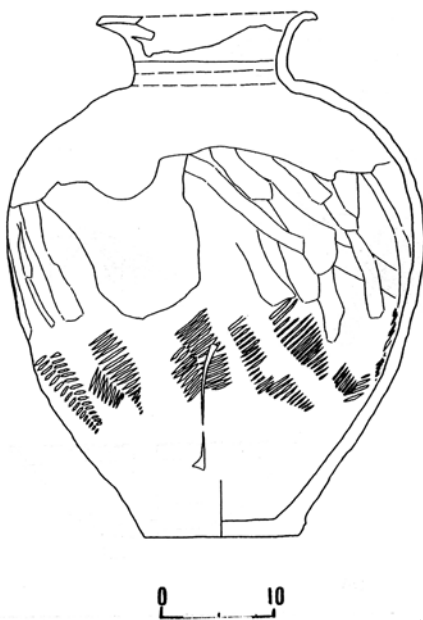
第5図 渥美全面施釉壺

わらけが伴っていました。かわらけを見るかぎりでは、平泉のものよりも若干古いものです。もしかしたら京都直結のかわらけかもしれません。

また、岩手県矢巾町の城内山頂遺跡から見つかったものは、マウントがまったくなくて、ただの石の窪みに入れられていました。東北の経塚では、小さな穴に入れるタイプのものはまずありません。ということで、出土状況から考えると、こ

れも若干年代が下がる可能性があります。

第6図は、寺ノ上経塚から出たものです。法華経が墨書された手づくねかわらけで、おそらく元々は10個体ほどあったと思われます。ここを盗掘した方がご存命だったのでお聞きしたところ、正位に埋められた壺の口縁のまわりに、このかわらけが正位で置いてあったということです。ただ、本当かどうかはわかりません。ただ、これは



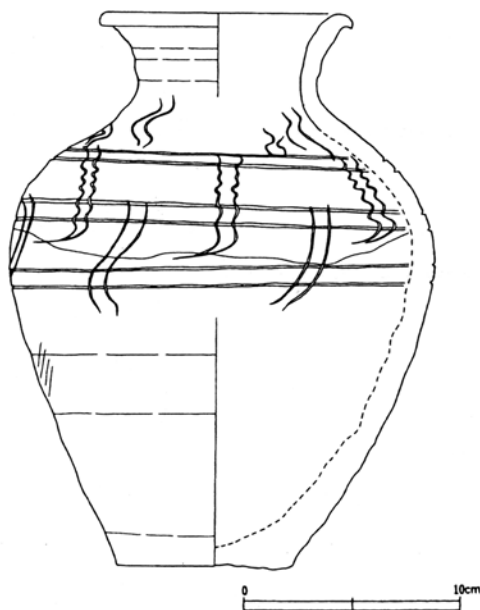
新文  
内面（如来神力品第二十一）  
随喜亦常礼拜供養釋迦牟尼佛彼諸衆生聞虛空中聲已合掌  
向婆娑世界作如是讚釋迦牟尼  
底面  
所散諸物從十方  
來譬如雲集  
變成寶帳遍  
覆此間諸佛  
外面（如来神力品第二十二）  
六種振動其中衆生  
天龍夜叉乾闥婆  
阿脩羅迦樓羅  
緊那羅摩睺羅伽  
人非人等以佛神力

第6図 寺ノ上経塚出土品

非常に薄くて、先にも述べたように京都直結のかわらけのように思われます。また、法華経のなかでも何かマジカルな部分がかかれていられるらしく、単なる経塚ではないのではないとも言われています。ということで、この壺は12世紀第3四半期の中でも、前の方にもってこることが可能かと思われます。

第7図は、先述の城内山頂遺跡の壺です。工事中に偶然発見されました。マウントも何もない岩の窪みに入れられていたので、埋納形態からいうと疑問のあるものです。岩手県北上市南部工業団地経塚はすべて盗掘されていましたが、全面発掘をした結果、積石や周溝を有する立派な経塚であることが分かりました。その中から見つかったのが、写真3の壺です。盗掘によりばらばらに壊されていました。ぼくはこれは、胎土から猿投のものだろうと思っていますが、中野さんによれば、「刻文があるものはすべて渥美のものだ」とのことですから、そうなのかもしれません。

また、岩手県山屋館経塚には3基の経塚があり、そのうち2基が盗掘されていました。残りの1基は、盗掘された2基の下にあったため難を逃れ、常滑壺が未盗掘のままで発見されました。写真4の口縁を打ち欠いている複線の櫛目三筋文壺で



第7図 城内山頂遺跡出土壺

す。興味深いのは、口縁部が打ち欠かれた須恵器系の波状文四耳壺が、盗掘経塚に残されていたことです。盗掘者には魅力がなかったようで、現場に残されていた須恵器系壺がかわいそうでした。

#### (6) 分布傾向

では、分布傾向です。経塚や墳墓の類は、太平洋側全域に分布します。渥美のものは、特に岩手



写真3 南部工業団地経塚出土壺



写真4 山屋館経塚出土常滑壺



県に多い傾向があります。第1図の「10」の岩手県北まで須恵器系陶器が来ており、このあたりまでが日本海の物流範囲だったと考えられます。

また渥美と常滑は、青森県八戸の少し南のあたりからの太平洋側と会津付近に見られます。ただ、会津で見られるといっても、福島県桑折町の平沢寺経塚(58)、福島市の天王寺経塚(59)、須賀川市の米山寺経塚(67)では、1171年銘を有する須恵器系陶器経筒が出土しています。特に米山寺経塚と平沢寺経塚の願主は、同一人物です。つまり1171年頃には、須恵器系の焼物を作って経塚を埋めるような権力者が福島県の南のあたりにはいたということで、そう考えると、常滑や渥美の製品は飛び地的に陸奥に入ってきていると思われれます。

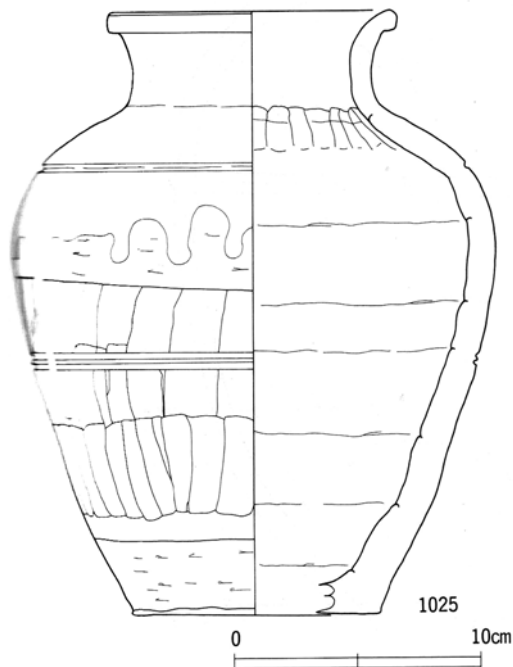
## 2. 生活遺跡から

次に、生活遺跡についてお話しします。

### (1) 岩手県平泉町泉屋遺跡

岩手県平泉町泉屋遺跡から、常滑の二筋文壺が出土しています。第8図をご覧ください。この壺は口縁が玉縁状になっており、平泉では他に例がなく、これ1つしかありません。一緒に出土している土器類からいけば、12世紀の平泉の範囲に納めるべきものだろうと考えます。単線の文様でぐるぐると描かれています。このような壺はあまり見られませんが、共伴遺物からいうと、平泉の最後のあたりに入れるべきかと思えます。

それと平泉町の志羅山遺跡の第52次調査区から、水路とともに水門みたいな遺構が発見されました。その下に滝つぼみたいなものがあつたのです。そこからは、12世紀の下駄等とともに、割れた大甕が出土しました。その甕を復元してみたところ、肩部から上は見つかりませんでした、そこから下は完形に復元されました。2型式の甕です。壊れた上部の割れ口には漆が残っており、これをルーペで観察すると、和紙が付着していました。おそらく、元々は和紙で蓋をして使用されていたと考えられますが、割れたためここに廃棄されたようです。これらを全部取り除いたら、滝



第8図 常滑二筋文壺

つぼの底から複線三筋文壺が横倒し状態で発見されました。これらは同時期のもので、2型式のものと考えられます(第9図)。

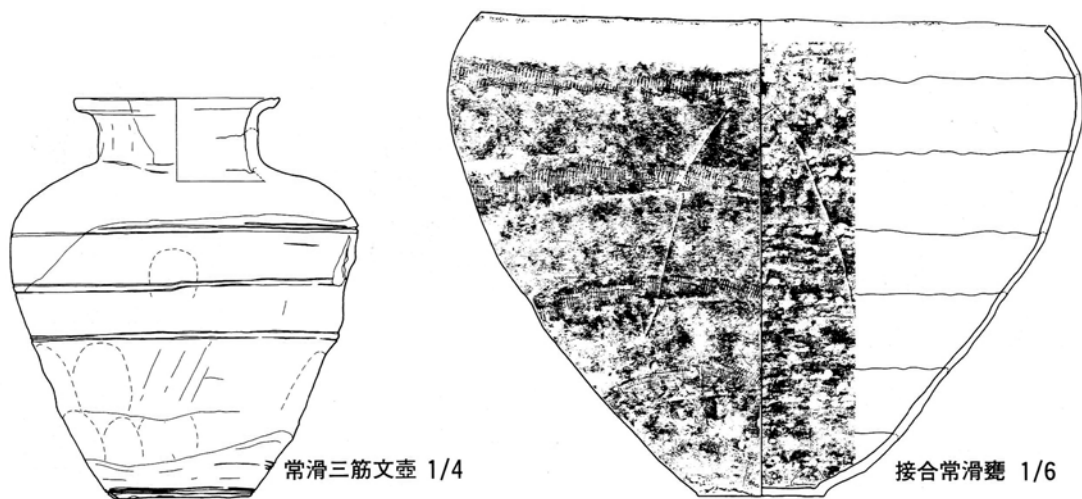
### (2) 岩手県平泉町柳之御所遺跡

もう一つ、柳之御所遺跡からは、安井さんの資料にもありましたが、渥美の大甕が出土しています。第10図です。この大甕は押印がランダムに押されており、頸部の取り付け方も非常にシャープです。口縁端部は縦方向に面取りしたタイプで、典型的な渥美のものです。これについては、安井さんは1a形式に入れておられました。そこまでいくかどうかは微妙ですが、1a形式に入る可能性があるものだと思います。平泉にはこのような大甕が存在します。

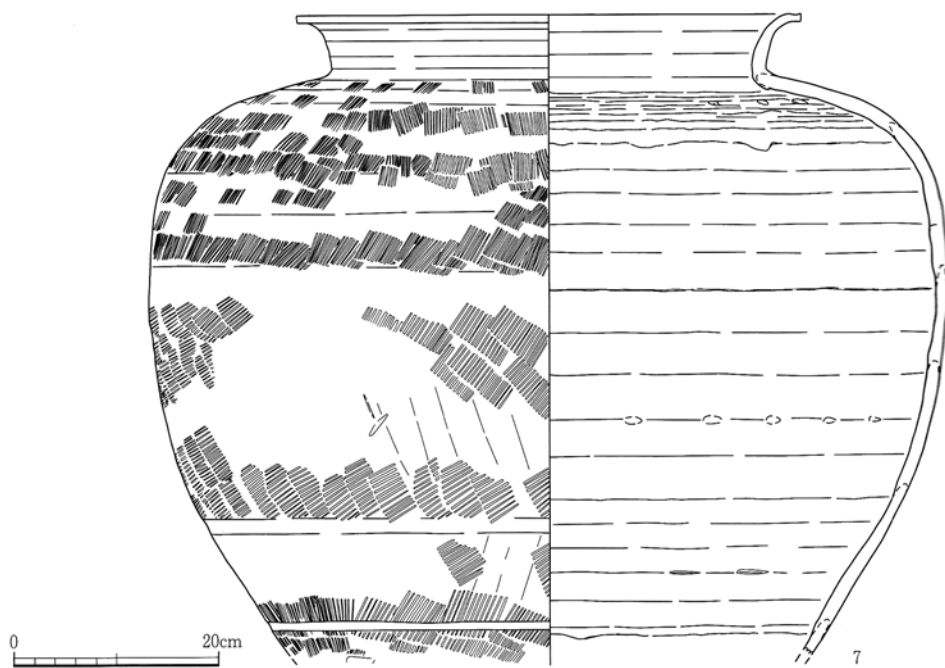
### (3) 宮城県石巻市水沼窯跡

袈裟襷文様の展開についても少しお話ししたいと思います。

宮城県石巻市水沼窯跡では、袈裟襷文壺を焼いていました。かつては12世紀前半のものとして報告されていましたが、再考してみたところ、大甕が



第9図 志羅山遺跡出土常滑



第10図 柳之御所遺跡出土渥美

非常に薄くできていていること、押印がランダムに押されていること、中の調整を見ると安定的に大甕を作れる技術が普及していると思われること等から、12世紀第2四半期のものであろうと思われま。前述の金鶏山のものに合わせて、おそらく袈裟禪文壺のスタートは、この頃のものでは

ないかと思われます。

#### (4) 福島県会津坂下町陣が峯城跡

次は、福島県会津坂下町陣が峯城跡です。先に述べた雷神山経塚も近くにあります。前述のとおり、会津では飛び地的に愛知県の焼物が入ってお

り、ここからは常滑の初期 1b 形式の大甕が出土しています。『玉葉』には、平泉藤原氏三代秀衡が会津の城を横領したとあるので、「この地で甕が出たといってもそれほどものではないだろう。秀衡と同じく、配下にしてやる」くらいの気持ちで赴いたところ、平泉以上のすばらしいもの



写真5 常滑突帯付縦耳四耳壺



写真6 渥美袈裟襷文壺

がたくさん出土しており、すごい遺跡だと驚いた次第です。

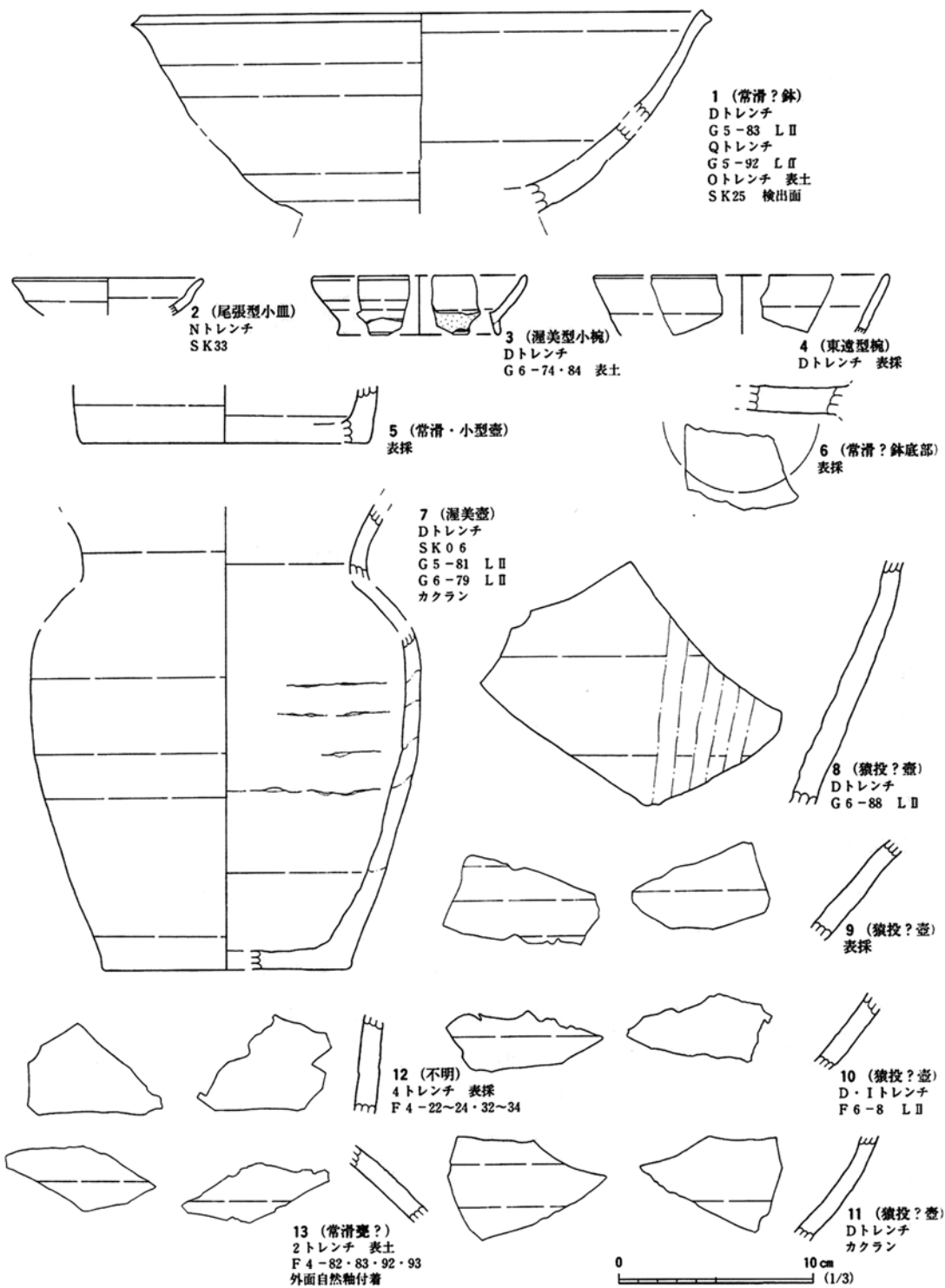
1b 形式の大甕もさることながら、第 11 図に載せている出土品、特にこの鉢 (1) はすごいものです。中野さんが「これは東海では引き受けられないよ」とおっしゃるのですが、東北でもこれは作れません。やはり、東海の常滑初期のものではないかと私は思っています。

あとは、平泉遺跡群の渥美や常滑のものです。常滑の凸帯付横耳四耳壺 (写真 5)、渥美の袈裟襷文に蓮弁文が入っているもの (写真 6)、常滑 2 型式の連弧文の大甕等が出土しています。

先ほど安井さんも話題にされましたが、この写真のものは静岡県石室寺経塚 (写真 7) から出土しているもので、ぼくも現物を見ましたが、1126 年の紀年銘が付いています。これは広口壺だと言われる方もおられますが、30～40cm の小さなものなので、ぼくの概念からすると、基本的には甕形態と考えています。押印もあります。頸部がなく、すぐに外反する形です。おそらく最古の甕だろうと思います。この段階で大甕を作ることができたのかどうかはわかりませんが、これを見ると可能に思われ、安井さんの編年でも肯定されていました。



写真7 石室経塚出土甕



第11図 陣が峯城跡出土遺物

### 3. まとめ

- ・東北地方の経塚から出土した渥美と常滑の製品は、基本的には12世紀後半のものです。
- ・渥美壺と須恵器系壺は一時期に埋納されるという例があります。資料には「渥美壺は12世紀第4四半期のものである」と書きましたが、これは平泉以降のことで、実際は13世紀第1四半期頃まで下る可能性があると思っています。
- ・金鶏山経塚出土の渥美袈裟禪文壺は、12世紀第2四半期のものです。
- ・東北で出土する全面施釉壺は、大アラコ窯で生産されたものではない可能性がありますが、藤原顕長が三河守だった1155年頃であれば、年代的にはかろうじて合致します。
- ・寺ノ上経塚の渥美壺は、12世紀第3四半期のものです。
- ・城内山頂遺跡の渥美刻画文壺は、12世紀第4四半期、平泉以降のものである可能性が高いと思っています。
- ・渥美と常滑の流通範囲については、陸奥に限られており、これは平泉藤原氏の直接的勢力範囲と合致します。
- ・平泉には1a形式に入る可能性のある渥美大甕があります。
- ・水沼窯跡は、12世紀第2四半期のものです。
- ・陣が峯城跡には、初期の常滑窯製品が入っています。

#### ●問題提起

そこで、ぼくが問題提起したいのは、次のことです。

- ・『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』に載っている年代観は本当に妥当なのかということです。ぼくは、渥美の壺はもう少し後まで残っていくと思っています。それについて中野さんは「根拠を示せ」とおっしゃいますが、大畑窯と思われる須恵器系の壺と一緒に出土していることが、そう思う理由の一つです。

渥美の窯資料で資料価値が高いのは、嶋の森古窯など12世紀後半以降の年代が与えられて

いるものだと思います。この資料は、何度も拝見しましたが、山茶碗の変化と甕壺の変化に齟齬はありません。ところが、調査年次が古いものの多くは、碗と甕の変化がうまくかみ合いません。この結果からは、様々な窯資料が混ざってしまっているのではないかと、という疑念が生じます。ありえないことではなく、おそらく一部にはそうなってしまったものもあるとは思いますが、しかしながらぼくは、それがすべてではないと考えております。

では、山茶碗の変化と壺甕の変化がシンクロしない理由はなにか。おそらく碗形態は、古代から存在するためある程度定型化しており、一定の変化をするのだと思います。対して、特に大甕は、古代の須恵器とは成形技法も異なる新たな焼き物なため、成形技法も定まっておらず、様々な様相を見せるのだと考えております。また注文生産という理由によることもあり得ます。

いずれ渥美は、生産が安定する12世紀中葉までは、特に大甕にばらつきが多いように感じています。つまり12世紀前半の大甕を器形や成形技法で編年することには、無理があるのではないのでしょうか。むしろ押印文などのマイクロの視点で分けた方がいいかもしれません。

- ・三筋文壺をきちんと編年できないだろうかと考えています。感覚としては、100年に3形式程度かと思います。
- ・袈裟禪文壺については、基本的には12世紀第2四半期から展開するのだろうと考えていますが、大した根拠はあまりありません。
- ・渥美と常滑窯の展開については、おそらく東北武士団の台頭と深く関係しているだろうと思っています。申し上げたように、経塚は末法思想と無関係ではありませんが、おそらくは阿弥陀堂信仰や阿弥陀信仰とともにスタートして隆盛を迎えていきます。経塚が12世紀後半にピークがあるとすれば、末法の初年からは100年も経っています。そう考えると、末法思想とは別に武士団の台頭が促す阿弥陀堂信仰や阿弥陀

信仰と深い関係にあるのではないかと思われま  
す。

- ・用途については、中野さんもおっしゃっていたように、平泉では埋甕遺構は皆無です。約 10 年前に、鎌倉で「生産地年代と消費状況」というシンポジウムが開催されましたが、そこでは大甕のことを「耐久消費材だ」と言っていました。しかし平泉では、長く保っている例はないと思います。むしろ、すぐに捨てられているというのが発掘側からの見解です。
- ・中野さんが言うように甕で酒を造ったかどうか根拠はありません。しかし平泉町内では、かわらけが全部で 20t 以上出土しています。大小あって、大きなものの平均重量が 215g、小さなものの平均重量が 67g だったと思います。それらすべてが酒を飲むのに使われたとは思いませんが、ある程度は使われていたと考えるなら、かなりの量の酒が必要だったはずで  
す。となると、甕は酒甕として使用されていた可能性は低くはないと思います。

何よりも平泉の時期には、全国的に言えることですが桶が存在しません。曲物しかありません。ぼくが知るかぎりでは、新安沖海底遺物の中に入っていた桶が最も古く、それは 14 世紀前半頃のものだと思います。近年、若干古いものも発見されているようですが、さかのぼっても 13 世紀後半頃でしょう。つまり、大型貯蔵用具はなかったわけで、そういう意味では、甕は非常に使い勝手のよいものだったと思います。大甕は、超大型貯蔵具としてどうしても必要なものであり、その制作技術が磨かれていったのでしょ  
う。すなわち、大甕を作ることができ  
るかどうかは、その窯を調べる時の重要な視点なのです。そして先程、石室経塚のものを甕の初現だとし、甕という形態がいつ生まれたのか、ということにこだわったのも、甕が大きな意味をもっているからです。

先ほど中野さんもおっしゃっていたように、「大甕は、かつては日常雑器というイメージだった」といわれていました。これは近世や近代の使用状況からもたらされたものです。しかし出

土状況を見ると、地方の交通と経済を掌握した豪族の遺跡以外では発見されていないとい  
っても過言ではありません。そしてその大甕で酒を造った可能性  
があるわけ  
です。

酒は宴会で使用していますが、当時の宴会というのは上下関係を確認したり、合意形成の場だったり、政治そのものです。そう考えると、甕というのは非常に大きな意味を持っていると思われ  
ます。そして、その中身を小分けする用途を与えられていったものが、おそらく壺だったと考  
えています。

ということで、宗教的な意味で中世陶器がスタートしたことに異論はないにしても、途中で武士たちによって別の読み替えがされて、言いかえれば初期武士の必須のアイテムとなり、武士団の形成すなわち主従関係を確認する宴会とともに全国に広がっていったのではないかと  
いうのがぼくの話の結論です。

以上です。ご清聴いただき、ありがとうございました。